

## DAFTAR PUSTAKA

- Abdurakhman, Hasanuddin. 2019. *Uchi & Soto Budaya Jepang, dari Keluarga ke Korporasi*. Jakarta: PT Gramedia Pustaka Utama.
- B. Pyle, Kenneth. 1988. *Generasi Baru Zaman Meiji*. Jakarta: PT Gramedia.
- B, Yunisti Winda Lestari. 2019. *Representasi Perubahan Sistem Keluarga Jepang Dalam Trilogi Film Karya Ozu Yasujiro (Pendekatan Semiotika) [skripsi]*. Makassar (ID): Universitas Hasanuddin.
- Bahtiar, Ahmad dan Aswinarto. 2013. *Metode Penelitian Sastra*. Tangerang: PT Pustaka Mandiri.
- Burhanuddin, Maulidiah. 2013. *Fenomena Prostitusi Dalam Novel In the Miso Soup (インザ。ミソスープ) Karya Ryu Murakami (Suatu Tinjauan Sosiologi Sastra) [skripsi]*. Makasaar (ID): Universitas Hasanuddin.
- Ghaisani, Shabrina Alifah. 2017. *Kepribadian Tokoh Utama Botchan Dalam Novel Botchan Karya Ntatsume Soseki (Kajian Psikoanalisis) [skripsi]*. Semarang (ID): Universitas Diponegoro.
- Ghiamitasya, Mellisa. 2012-2013. *Perubahan Peran Ayah Dalam Pengasuhan Anak Di Jepang Pada Era Shushika*. dalam *Jurnal Japanology* Vol. 1 No.1 September 2012 – Februari 2013 : 96 – 102. Surabaya: Program Studi Sastra Jepang Fakultas Ilmu Budaya Universitas Airlangga.
- Jabrohim (editor). 2012. *Teori Penelitian Sastra*. Yogyakarta: Pustaka Pelajar
- K.S., Dyah Ayu Andita. 2010. *Kritik Sosial Dalam Novel Berjuta-Juta Dari Deli Karya Emil W. Aulia (Tinjauan Sosiologi Sastra) [skripsi]*. Surakarta (ID): Universitas Sebelas Maret.
- Marlina. 2014. *Problematika Kehidupan Waria Dalam Drama Deleilah Tak Ingin Pulang Dari Pesta Karya Puthut EA : Tinjauan Sosiologi Sastra. [skripsi]*. Makassar (ID): Universitas Hasanuddin.
- N Anwar, Etty. 2007. *Ideologi Keluarga Tradisional "Ie" dan Kazoku Kokka Pada Masyarakat Jepang Sebelum dan Sesudah Perang Dunia II*. dalam *Wacana*, vol. 9 no. 2, Oktober 2007 (194-205).
- Natsume, Souseki. 2012. *Botchan (坊ちゃん)*. Diterjemahkan oleh: Jonjon Johana. Jakarta: Kansha Books.
- Rahmah, Yuliani. 2017. *Konsep Ie Dalam Organisasi Sosial Masyarakat Jepang*. dalam *Kiryoku*, vol.1 no.3. Fakultas Ilmu Budaya Universitas Diponegoro.
- Semi, Atar. 2013. *Kritik Sastra*. Bandung: Angkasa
- Tadashi, Fukutake. 1988. *Masyarakat Jepang Dewasa Ini*. Diterjemahkan oleh : Haryono. Jakarta: PT. Gramedia.

- Tadashi, Fukutake. 1989. *Masyarakat Pedesaan di Jepang*. Diterjemahkan oleh : Haryono. Jakarta: PT. Gramedia.
- Teeuw, A. 1993. *Khazanah Sastra Indonesia*. Jakarta: Balai Pustaka.
- Wahyudi, Tri. 2013. *Sosiologi Sastra Alan Swingewood Sebuah Teori*. dalam Jurnal Poetika Vol. 1 No. 1 Juli 2013. Yogyakarta: Pascasarjana Ilmu Sastra Fakultas Ilmu Budaya UGM.
- Widiandari, Asri. 2016. *Fenomena Shoushika di Jepang : Perubahan Konsep Anak*. dalam Izumi, vol. 5 no.1. Fakultas Ilmu Budaya Universitas Diponegoro.
- Wellek, Rene dan Warren Austin. 2016. *Teori Kesusastraan*. Diterjemahkan oleh : Melani Budianta. Jakarta: PT. Gramedia.
- Zari, Asmira. 2012. *Fenomena Sosial Dalam Drama Daremo Shiranai Karya Hirokazu Koreda [skripsi]*. Makassar (ID): Universitas Hasanuddin.

#### Website

<https://www.japantimes.co.jp/culture/2014/01/04/books/book-reviews/botchan/> [diakses 09-November-2020]

<https://asianwiki.com/Botchan> [diakses 09-November-2020]

Natsume, Souseki, *Botchan*. Original Text.

<http://www.natsumesoseki.com/home/botchan> [diakses 09-November-2020]

<https://souzoku.vbest.jp/legatee/division/div005#:~:text=%E9%81%BA%E7%94%A3%E5%85%B1%E6%9C%89%E3%81%A8%E3%81%AF%E3%80%81%E5%8B%95%E7%94%A3,%E3%81%84%E3%82%8B%E7%8A%B6%E6%85%8B%E3%82%92%E3%81%84%E3%81%84%E3%81%BE%E3%81%99%E3%80%82> [diakses 09-Desember-2020]

<https://englishlawyersjapan.com/how-is-inheritance-divided-between-co-heirs-in-japan/> [diakses 09-Desember-2020]

<http://yoshida.houmu-souzoku.com/29.12.24.html> [diakses 09-Desember-2020]

<http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2015/kekka.html> [diakses 17-Februari-2021]

# LAMPIRAN

## Objek Penelitian Novel Botchan

### Novel asli

← → ↻ Tidak aman | natsumesoseki.com

作品 リスト

- [『鐘の男』を読む](#)
- [『伝説の時代』序](#)
- [『土』に就て](#)
- [『心』自序](#)
- [『東洋美術図譜』](#)
- [『煤煙』の序](#)
- [こころ](#)
- [それから](#)
- [イズムの功過](#)
- [カーライル博物館](#)
- [ケーヘル先生](#)
- [ケーヘル先生の告別](#)
- [コンラッドの描きたる自然について](#)
- [マードック先生の『日本歴史』](#)
- [一夜](#)
- [三四郎](#)
- [三山居士](#)
- [中味と形式](#)
- [予の描かんと欲する作品](#)

夏目漱石 1867年2月9日 ~ 1916年12月9日(享年49)

帝国大学(現東京大学)英文科卒業



代表作品

- [吾輩は猫である](#)
- [坊っちゃん](#)

Activate W  
Go to Settings

← → ↻ Tidak aman | natsumesoseki.com/home/botchan

### 坊っちゃん

📄 Ads by Google 表示 閉じる 翻訳

—

親譲おやゆずりの無鉄砲むてっぽうで小供の時から損ばかりしている。小学校に居る時分学校の二階から飛び降りて一週間ほど腰こしを抜めかした事がある。なぜそんな無闇むやみをしたと聞く人があるかも知れぬ。別段深い理由でもない。新築の二階から首を出していたら、同級生の一人が冗談じょうだんに、いくら威張っていても、そこから飛び降りる事は出来まい。弱虫やーい。と囃はやしたからである。小使こづかいに負ぶさって帰って来た時、おやじが大きな眼めをして二階ぐらから飛び降りて腰を抜かす奴やつかがあるかと言いつたから、この次は抜かさずに飛んで見せますと答えた。

親類のものから西洋製のナイフを貰もらって奇麗きれいな刃を日に磨かざして、友達ともだちに見せていたら、一人が光る事は光るが切れそうもないと云った。切れぬ事があるか、何でも切ってみせると受けた。そんなら君の指を切ってみろと注文したから、何だ指ぐらいこの通りだと右の手の親指の甲こうをはずして切り込んだ。幸い悪いナイフが小さいのと、親指の骨が堅かたかったので、今だに親指は手に付いている。しかし創痕きずあとは死ぬまで消えぬ。

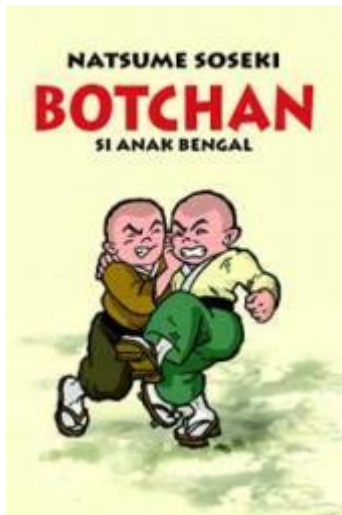
庭を東へ二十歩に行き尽すと、南上かりに、いさかばかりの菜園があつて、真中まんなかにも栗くりの木が一本立っている。これは命より大事な栗だ。実の熟する時は起き抜けに背戸せどを出て落ちた奴を拾ってきて、学校で食う。菜園の西側か山城屋やましろやという質屋の庭続きで、この質屋に勤太郎かんたろうという十三四の俵せがれが居た。勤太郎は無論弱虫である。弱虫の癖くせに四つ目垣を乗り越えて、栗を盗ぬすみにくる。ある日の夕方折戸おりどの蔭かげに隠かくれて、とうとう勤太郎を捕つらまえてやった。その時勤太郎は逃にげ路みちを失って、一生懸命いっしょうけんめいに飛びかかってきた。向むこうは二つばかり年上である。弱虫だが力は強い。鉢はちの聞いた顔を、こっちの胸へ宛あてててくしくい押おした拍子ひょうしに、勤太郎の頭がずべて、おれの袴あわせの袖そでの中にはいった。邪魔邪魔になつて手が使えぬから、無暗に手を振ふたら、袖の中にある勤太郎の頭が、右左へぐくら塵なびいた。しまいには舌が舌が袖の中から、おれの二の腕うでへ食い付いた。痛かったから勤太郎を垣根へ押しつけておいて、足揃あしからをかかへて向うへ倒しておしてやった。山城屋の地面は菜園より六尺かた低い。勤太郎は四つ目垣を半分崩くずして、自分の額分へ真逆さまさかさまに落ちて、ぐうと云った。勤太郎が落ちるときに、おれの袴の片袖がはげて、急に手が自由になった。その晩母が山城屋に詫言ひに行つたついでに袴の片袖も取り返して来た。

この外、むすらは大分やった。大工の兼公かこうと着屋さかやの角かづつて、茂作もさくの人参参にんじんばたけをあらした事がある。人参の芽が出揃でそろむゆいん処ところへ葉わらか一面に敷いてあったから、その上で三人が半日相撲すもうをとつづけに取つたら、人参がみんな踏ふみつぶされてしまった。古川ふるかわの持持ていよ田圃たんぼの井戸、どを埋うめて戻しりを持ち込まれた事もある。太い孟宗もうそうの節を抜いて、深く埋めた中から水が湧き出て、そこの種いねにみずがつかかる

祝勝会で学校はお休みだ。練兵場へいよいよ式があるというので、狸たぬきは生徒を引率して参列しなくてはならない。おれも職員の一員ひとりとしていっしょにくっついて行くんだ。町へ出るのと日の丸だけだ。まじまじと見ている。学校の生徒は八百人もあるのだから、体操の教師が隊伍たいごを整えて、一組一組の間を少しずつ明けて、それへ職員が一人か二人ふたりずつ監督かんごととして割り込こむ仕掛しかけである。仕掛しかけだけはすこぶる巧妙こうみょうなものだが、実際はすこぶる不手際である。生徒は小供ごどもの上に、生意気で、規律を破らなくていい生徒の体面にかかわると思っている奴等やつらだから、職員が幾人いかりついで行っただけで何の役に立つもんか。命令も下さないのに勝手に軍歌をうたったり、軍歌をやめるとワーッと怒りだすのに聞かぬ声の響あがたり、まるで浪人ろうにんが町内をねりあるようなものだ。軍歌も聞の声も響あがらぬ時どきかやがやか喋りしゃべって。喋りしゃべらないでも歩けそうなんだから、日本人はみな口から先へ生れるのだから、いくら小言を云いっただけで聞きこない。喋りしゃべるのもたまたま喋りしゃべるのでもない、教師のわる口を喋りしゃべるのだから、下等だ。おれは宿直事件で生徒を謝罪して、まあこれならよろうと思っていた。ところが実際は大違おちかちかである。下宿の婆はあさんの言葉を借りて云えば、正に大違いの勘五郎かんとごうである。生徒があやまったのは心しんから後悔こうかいしてあやまったのではない、ただ校長から、命令されて、形式的に頭を下げたのである。商人が頭ばかり下げて、狡ずるい事をやめぬのと一般で生徒も謝罪しただけはするが、いたずらは決してやめるものでない。よく考えてみると世の中はみんなこの生徒のようなものから成立しているかも知れない。人があやまったり詫わびたりするのを、真面目まじめに受けて勤弁するのには正直ちかま馬鹿ばかど云うだろう。あやまるのも戻りにあやまるので、勤弁するのにも戻り勤弁するのだと思えば差さ支つかえぬ。もし本当にあやまらせる気なら、本当に後悔するまで叩たたきつけてくれない。おれが組と組の間には行って行く、天竺羅てんたくらだの、団子だんごだの、と云う声が絶えずする。しかも大勢だから、誰だれが云うのだから分らない。よし分ってもおれの事を天竺羅と云ったんじやありません、団子と申したんじやありません、それは先生が天竺羅てんたくらだの、と云うから分らない、ひかんで、そう聞かなくらい云うに極きまてる。こんな卑劣ひねくれた根性は封建時代から、養成されたこの土地の習慣なんだから、いくら云って聞かしたって、教えてやっただけで、到底どういっただけで、こんな土地に一年も居ると、潔白なおれも、この真似まねをしなけれはならぬ、なるかも知れない。向こうでうまうま言ひ抜ぬけられるような手段で、おれの顔を汚よごすのを抱ほうておく、樽蒲一ちよまはれない。向こうか人ならおれも人だ。生徒だつて、子供だつて、ずう体はおれより大きい。だから刑罰せいばつとして何か返報をしてやらなくては義理がわるい、ところがこっちらから返報をする時分に尋常じんじょうの手段で行くと、向こう逆戻りかえしを食わして来る。責めがわるいからだと云うと、初手から逃にげ路みちが作つてある事だから滔々とうとうと弁立てる。弁立てておいて、自分の方を表向きだに立派にしてそれからこっちらの非を攻撃こうげきする。もともと返報にした事だから、こっちらの弁立ては向うの非が等かたない。弁立てならぬ。つまりは向うから手を出しておいて、世間体はこっちらが仕掛けた御座けんかのよう。見做みなされた。大変不利だ。それなら向うのやるなり、愚迂多良童子くうたらどうしを極め込んでいけば、向うはますます増長するばかり、大きく云えば世の中のためにならない。そこで仕方がないから、こっちらも向うの筆法を用いて捕つらまえられぬ、手の付けようのない返報をしないでならぬ。そうなつては江戸えどつ子も駄目だ。駄目だが一年も向うは居られる以上は、おれも人間だから駄目でも何でもそうならなくちゃ始末がつかない。どうでも早く東京へ帰って清きよといっしょになるに限る。こんな田舎いかに居るのは墮落たらくしに來ているようなものだ。新聞配達をしたって、ここまで墮落するよりはました。こう考えて、いやいや、附いてくると、何だか先鋒せんぽうか急にかやがや騒さわぎ出した。同時に列はびたりと留まる。変だから、列を右へはずして、向うを見ると、大手町おおてまちを突つき当って薬師町やくしまちへ曲がる角の所で、行き詰つまつたとき、押おし返したり、押し返されたりして揉み合っている。前方から静かに静かに声を返からして来た体操教師に何ぞと聞くと、曲り角で中学校と師範はん学校が衝突しようとしたんだと云う。

ら、無暗に手を振ふつら、袖の中にある勘太郎の頭が、左右へぐらぐら靡びた。しまいに舌しかって袖の中から、おれの二の腕うでへ食い付いた。痛かったから勘太郎を垣根へ押しつけておいて、足揃あしらがをきかけて向うへ倒たおしてやった。山城屋の地面は菜園より六尺かた低い。勘太郎は四つ目垣を半分崩くずして、自分の頭分へ真逆さまさかさまに落ちて、ぐと云った。勘太郎が落ちるときに、おれの袴の片袖もがけて、急に手が自由になった。その晩母が山城屋に詫わびに行っただけで袴の片袖も取り返して来た。この外いづらは大分やった。大工の兼公かこうと着屋さかなやの角かををつれて、茂作もさくの人参参にんじんばたけをあらした事がある。人参の芽が出揃でそろわぬ処ところへ葉わらが一面に敷いてあったから、その上で三人が半日相撲すもうをとりつづけに取つたら、人参がみんな踏みつぶされてしまった。古川ふるかわの持っている田圃たんぼの井戸いどを埋うめて戻しりを持ち込まれた事もある。太い孟宗もうそうの節を抜いて、深く埋めた中から水が湧き出て、そこいらの稲いねにみずがわかゆる仕掛しかけであった。その時分はどんな仕掛か味らぬから、石や棒ぼうちざれをぎゅうぎゅう井戸の中へ挿さし込んで、水が出なくなつたのを見届けて、うちへ帰って飯を食っていたら、古川が真赤まっかになつて怒鳴どなり込んで来た。たしか罰金ばっせんを出して済んだようである。おやしはちつともおれを可愛かわいがかってくねなかつた。母は兄ばかり鼻肩ひげにしていた。この兄はやくに色が白くって、芝居しいの真似まねをして女形おんなかたになるのが好きだ。おれを見る度にこいつはどうせ碌ろくなものにはならぬと、おやしが云った。乱暴で乱暴で行く先が案じられたと母が云った。なるほど碌なものにはならぬ。ご覧の通り始末である。行く先が案じられたのも無理はない。ただ勘五郎かんとごうに生きているばかりである。母が病気で死ぬ二三日にさんち前所所で番返りをしてへつ、の角で肋骨あはらまねを撲うって大いに痛かった。母が大層怒おこって、お前のようなもの顔は見たくないと云うから、親類へ泊とまりに行っていた。するとどうとう死んだと云う報知らせが来た。そう早く死ぬとは思わなかつた。そんな大病なら、もう少し大人おとなしくすればよかったと思つて帰って来た。そうしたら例の兄がおれを親不孝だ、おれのために、おっさんが早く死んだんだと云った。口惜くやしかつたから、兄の横っ面を張って大変叫しかられた。母が死んでからは、おやしと兄と三人で暮らしていた。おやしは何にもせぬ男で、人の顔さえ見れば責めは駄目だ駄目と口癖のように云っていた。何が駄目なんだか今に分らない。妙みょうなおやしがあつたもんだ。兄は実業家になるとか云って英語を勉強していた。元來女のような性分、するから、仲がよくなかつた。十日に一連いっぺんぐらいの劇で御座けんかをして。ある時待機しょうぎをさしたら車ひきぎょうな待駒まちごまをして、人が困ると嫌うしうそうに冷やかした。あんまり腹が立つたから、手に在った飛車を肩間みけんへ擲たたきつけてやった。肩間が割れて少々血が出た。兄がおやしに言いつけた。おやしがおれを勘当かんとどうすると言いつけた。その時はもう仕方がない親にして先方の云う通り勘当されるつもりでいたら、十年來召し使っている清きよという下女が、泣きながらおやしに詫あやまって、ようやくおやしの怒りかりが解けた。それにもかわからずあまりおやしを怖こわいとは思わなかつた。かえってこの清と云う下女に気の毒であった。この下女はもと由緒ゆいしよのあるものだったそうだが、瓦解かいのときに零落れいらくして、つい奉公ほうこうまでするようになったのだと聞いている。だから婆はあさんである。この婆さんかどういっただけで困練いんえんか、おれを非常に可愛かわいにくれた。不思議なものである。母も死ぬ三日前に愛想あいそをつかした——おやしも年中持て余している——町内では乱暴者の黒太八くろやちやん弾つまじきをする——このおれを無暗に珍重ちんじゆうしてくれた。おれは到底どういっただけで人に好かれる性たぢでないとあきらめていたから、他人から木の端はしのように取り扱あつかわれるのは何とも思わぬ、かえってこの清のようにちやほやしてくれるのを不審ふしんに考えた。清は時々台所での居ぬ、時に「あなたはいま真まっ直すくでよい、こ

## Novel Terjemahan



### Lampiran Data

#### Kutipan 1 :

母が死んでからは、おやじと兄と三人で暮っていた。

*Haha ga shindekara wa, Oyaji to Ani to sannin de kurashiteita.*

“Setelah kematian ibu, aku hidup bertiga dengan Ayah dan kakakku”

(Natsume Souseki (terjemahan Jonjon Johana, 2012:9))

#### Kutipan 2 :

十年來召し使っている清という下女が、

*Juu nenrai meshi tsukatte iru shin to iu gejo ga,*

“Tetapi, Kiyo pembantu perempuan yang telah bekerja 10 tahun,”

(Natsume Souseki (terjemahan Jonjon Johana, 2012:10))

#### Kutipan 3 :

町はずれの岡の中腹にある家で至極閑静だ。主人は骨董を売買するいか銀と云う男で、女房は亭主よりも四つばかり年嵩の女だ。

*Machihazure no Oka no chūfuku ni aru ie de shigoku kanseida. Shujin wa kottou o baibai suru ika gin to iu otokode, nyoubou wa teishu yori mo yottsū bakari toshikasa no onnada.*

“Tempat kos itu terletak di pertengahan jalan ke bukit di pinggiran kota, tempat yang sangat tenang. Si pemilik rumah bernama Ikagin, tukang jual beli barang antik, dan istrinya lebih tua kira-kira 4 tahun dari pada suaminya.”

(Natsume Souseki (terjemahan Jonjon Johana, 2012:40))

#### Kutipan 4 :

この裏町に萩野と云って老人夫婦ぎりで暮らしているものがある、いつぞや座敷を明けておいても無駄だから、たしかな人があるなら貸してもいいから周旋してくれと頼んだ事がある。

*Kono uramachi ni Hagino to yutte roujin fuufuu giri de kurashite iru mono ga aru, itsuzoya zashiki o akete oite mo mudadakara, tashikana hito ga arunara kashite mo ikara shūsen shite kure to tanonda koto ga aru.*

“di pinggir kota ini tinggal suami-istri yang sudah tua bernama Hagino, mereka pernah mengatakan hendak menyewakan rumahnya dan meminta rekomendasi tentang orang yang bisa dipercaya, karena katanya mubazir kalau tempatnya dibiarkan kosong begitu saja.”

(Natsume Souseki (terjemahan Jonjon Johana, 2012:124))

Kutipan 5 :

これでも元は旗本だ。旗本の元は清和源氏で、多田の満仲の後裔だ。

*Koredemo gen wa hatamotoda. Hatamoto no gen wa Seiwagenji de, tada no manjuu no koueida.*

“Begini-begini, aku ini keturunan perwira tinggi bawahan langsung jenderal. Aku adalah cucu-buyut perwira tinggi dari Jendral Manju di Tada yang berasal dari Seiwagenji, salah satu keluarga samurai.”

(Natsume Souseki (terjemahan Jonjon Johana, 2012:71))

Kutipan 6 :

この夫婦はいか銀とは違って、もとが士族だけに双方共上品だ。

*Koko no fuufuu wa ikagin to wa chigatte, moto ga shizoku dake no shouhou kyou jouhinda.*

“Suami-Istri di sini berbeda sekali dengan Ikagin, karena memang turunan samurai, keduanya sangat santun.”

(Natsume Souseki (terjemahan Jonjon Johana, 2012:126))

Kutipan 7 :

ある時将棋をさしたら卑怯な待駒をして、人が困ると嬉しそうに冷やかした。あんまり腹が立ったから、手に在った飛車を眉間へ擲きつけてやった。眉間が割れて少々血が出た。兄がおやじに言付けた。おやじがおれを勘当すると言い出した。

*Aru toki shōgi o sa shitara hikyōna machi koma o shite, hito ga komaru to ureshi-sō ni hiyakashita. Anmari hara ga tattakara,-te ni atta hisha o miken e tata Kitsukete yatta.Miken ga warete shōshō chigadeta. Ani ga oyaji ni kotodzuketa. Oyaji ga ore wo kandou suru to ii dashita.*

“Suatu kali, ketika kami bermain catur, dia berbuat curang lalu menertawaiku yang berada dalam posisi sulit. Karena kesal, aku memukulkan pion ke dahinya hingga sobek dan berdarah. Karena kesal aku memukulkan pion ke dahinya hingga sobek dan berdarah. Kakaku mengadu, dan Ayah mengatakan bahwa dia akan mencabut hak warisku.”

(Natsume Souseki (terjemahan Jonjon Johana, 2012:10))

Kutipan 8 :

兄はそれから道具屋を呼んで来て、先祖代々の瓦落多を二束三文に売った。家屋敷はある人の周旋である金満家に譲った。

*Ani wa sore kara douguya wo yonde kite, senzo daidai no garakuta wo nisokusanmon ni utta. Ie yashiki wa aru hito no shuusende aru kinmanka ni yuzutta.*

“Setelah itu, kakakku segera memanggil tukang loak dan dia menjual barang rongsokan turun-temurun dengan harga yang sangat murah. Sedangkan rumah di jual pada orang kaya.”

(Natsume Souseki (terjemahan Jonjon Johana, 2012:16-17))

Kutipan 9 :

清は十何年居たうちが人手に渡るのを大いに残念がったが、自分のものではないから、仕様がなかった。あなたがもう少し年をとっていらっしやれば、ここがご相続が出来ますものとしきりに口説いていた。もう少し年をとって相続が出来るものなら、今でも相続が出来るはずだ。婆さんは何も知らないから年さえ取れば兄の家がもらえると信じている。

*Shin wa juu nan-nen ita uchi ga hitode ni wataru no wo ooini zannen gattaga, jibun no monodenaikara, shiyō ga nakatta. Anata ga mousukoshi toshi wo totte irasshareba, koko ga gosouzoku ga dekimasu mono no wo toshikiri ni kudoiteita. Mōsukoshi toshi o totte sōzoku ga dekiru mononara, imademo sōzoku ga dekiru hazuda. Bāsan wa nani mo shiranaikara toshi sae toreba ani no ie ga moraeru to shinjite iru.*

“Kiyo sangat kecewa karena rumah yang pernah ditinggalinya selama belasan tahun kini berpindah tangan, namun tidak ada yang bisa dia perbuat karena itu bukan miliknya.

“Kalau umur Botchan sedikit lebih tua sebenarnya Botchan bisa mewarisi rumah ini,” katanya ngotot. Kalau dengan umur sedikit bertambah bisa mewarisi rumah ini, mestinya sekarang pun aku bisa mewarisinya. Karena nenek ini tidak tahu apa-apa, maka dia yakin bahwa jika umurku bertambah aku bisa mendapatkan rumah kakakku.”

(Natsume Souseki (terjemahan Jonjon Johana, 2012:17))

Kutipan 10 :

九州へ立つ二日前兄が下宿へ来て金を六百円出してこれを資本にして商買しょうばいをするなり、学資にして勉強をするなり、どうしても随意ずいいに使うがいい、その代りあとは構わないと云った。

*Kyūshū e tatsu futsukamae ani ga geshuku e kite kin o roppyaku en dashite kore o shihon ni shite shō-kai syoubai wo surunari, gakushi ni shite benkyō o suru nari, dō demo zuiizu ī ni tsukauga ī, sono dairi ato wa kamawanai to yutta.*

“Dua hari sebelum keberangkatan ke Kyushu, kakakku datang ke tempat kos-ku. Dia memberikan uang sebesar 600 yen, “Kamu gunakan saja uang ini sesukamu, mau dijadikan modal dagang atau pun biaya sekolah, terserah kamu, namun aku takkan mengurusmu lagi,” katanya.

(Natsume Souseki (terjemahan Jonjon Johana, 2012:18))

Kutipan 11 :

小使に負ぶさって帰って来た時、おやじが大きな眼をして二階ぐらいから飛び降りて腰を抜かす奴があるかと云ったから、この次は抜かさずに飛んで見せますと答えた。

*Kodzukai ni obusatte kaette kita toki, oyaji ga ookina me wo shite ni-kai furai kara tobiorite koshi wo nukasu yatsu ga aru to yuttakara, kono-ji wa nukasazu ni toned misemasu to kotaeta.*

“Ketika aku pulang dengan dibopong pesuruh sekolah, Ayah berkata sambil melotot, “Mana ada orang yang terkilir hanya karena loncat dari lantai dua””

(Natsume Souseki (terjemahan Jonjon Johana, 2012:1))

Kutipan 12 :

おやじはちっともおれを可愛がってくれなかった。母は兄ばかり鼻壼にしていた

*Oyaji wa chittomo ore wo kawai gattekurenakatta. Haha wa ani bakari hiiki ni shiteita.*

“Ayah sama sekali tidak menyayangiku. Sedangkan ibu hanya mementingkan kakakku.”

(Natsume Souseki (terjemahan Jonjon Johana, 2012:8))

Kutipan 13 :

お前のようなものの顔は見たくないと云うから、

*Omae no youna mono no kao wa mitakunai to iu kara.*

““Ibu tidak sudi lagi melihatmu”, katanya”

(Natsume Souseki (terjemahan Jonjon Johana, 2012:9))

Kutipan 14 :

おれを見る度にこいつはどうせ碌なものにはならないと、おやじが云った

。

*Ore wo miru tabi ni koitsu wa douse rokuna mono ni naranaito, oyaji ga yutta.*

““Anak ini takkan menjadi manusia yang berguna”, ayah selalu berkata begitu setiap melihatku.”

(Natsume Souseki (terjemahan Jonjon Johana, 2012:14))

Kutipan 15 :

おやじには叱られる。兄とは喧嘩をする。

*Oyaji ni wa shikarareru. Ani to wa kenka wo suru.*

“Ayah sering memarahiku. Sedangkan dengan kakakku, aku selalu betengkar”

(Natsume Souseki (terjemahan Jonjon Johana, 2012:15))

Kutipan 16 :



この下女はもと由緒のあるものだったそうだが、瓦解のときに零落して、つい奉公までするようになったのだと聞いている。だから婆さんである。この婆さんがどういう因縁か、おれを非常に可愛がってくれた。

*Kono gejo wa moto yuisho no aru monodatta sōdaga, gakai no toki ni reiraku shite, tsui hōkō made suru yō ni natta noda to kiite iru. Dakara bāsandearu. Kono bāsan ga dōiu in'nen ka, ore o hijō ni kawai gatte kureta.*

“Pembantu ini sebenarnya orang yang berharkat, tetapi pada saat Restorasi [keruntuhan pemerintahan samurai] keluarganya terpuruk, dan akhirnya menjadi pembantu, begitulah yang kudengar. Itulah sebab aku memanggilnya nenek. Dan nenek ini, entah apa alasannya sangat menyayangiku.”

(Natsume Souseki (terjemahan Jonjon Johana, 2012:10))

Kutipan 17 :

折々は自分の小遣いで金鰐や紅梅焼を買ってくれる。寒い夜などはひそかに蕎麦粉を仕入れておいて、いつの間にか寝ている枕元へ蕎麦湯を持って来てくれる。時には鍋焼饅頭さえ買ってくれた。ただ食べ物ばかりではない。靴足袋ももらった。鉛筆も貰った、帳面も貰った。これはずっと後の事であるが金を三円ばかり貸してくれた事さえある。何も貸せと云った訳ではない。向うで部屋へ持って来てお小遣いがなくてお困りでしょう、お使いなさいと云ってくれたんだ。

*Oriori wa jibun no kodzukai de kintsuba ya kōbaiyaki o katte kureru. Samui yoru nado wa hisoka ni sobako o shiirete oite, itsunomanika nete iru makuramoto e sobayu o motte kite kureru. Tokiniha nabeyakiudon sae katte kureta. Tada kuimono bakaride wanai. Kutsutabi mo moratta. Enpitsu mo moratta, chōmen mo moratta. Kore wa zutto ato no kotodearuga kin o san-en bakari kashite kureta koto sae aru. Nani mo kase to yutta wakede wanai. Mukō de heya e motte kite o kodzukai ga nakute o komarideshou, otsukai nasai to yutte kureta nda.*

“Dia juga pernah membelikan aku kue isi kacang merah atau opak berbentuk bunga plum. Pada malam-malam yang dingin, dia membeli tepung soba dengan menggunakan uangnya sendiri, dan tahu-tahu dia sudah meletakkan bubur tepung soba itu di samping bantal tidurku. Kadang dia membelikan udo dalam panci tembikar. Bukan hanya makanan. Aku pernah diberi kaus kaki, juga pensil. Juga buku notes dan lainnya. Bahkan-ini ceritanya masih jauh ke depan- dia meminjamiku uang tiga yen, padahal aku tidak meminta. Dia yang datang ke kamarku, dan berkata, “Botcan pasti sedang kesusahan karena tidak punya uang jajan ya, pakailah ini,” katanya.”

(Natsume Souseki (terjemahan Jonjon Johana, 2012:11-12))

Kutipan 18 :

しかし清がなるなると云うものだから、やっぱり何かに成れるんだろうと思っていた。

*Shikashi shin ga narunaru to au monodakara, yappari nanika ni narerundarou to omotteita.*

“Tetapi karena Kiyo selalu mengatakan bahwa aku pasti akan menjadi orang hebat, maka aku mulai yakin akan menjadi sesuatu juga.”

(Natsume Souseki (terjemahan Jonjon Johana, 2012:14))

Kutipan 19 :

清には菓子を貰う、時々賞められる。

*Shin ni wa kashi o morau, tokidoki home rareru.*

“Sementara Kiyoko selalu memberiku pujian dan kadang-kadang kue.”

(Natsume Souseki (terjemahan Jonjon Johana, 2012:15))

Kutipan 20 :

おれは到底人に好かれる性でないとあきらめていたから、他人から木の端のように取り扱われるのは何とも思わない、かえってこの清のようにちやほやしてくれるのを不審に考えた。

*Ore wa tōtei hito ni sukareru-seidenai to akiramete itakara, tanin kara ki no hashi no yō ni toriatsukawa reru no wa nantomo omowanai, kaette kono Shin no yō ni chiyahoya shite kureru no o fushin ni kangaeta.*

“Karena aku sudah pasrah bahwa aku memang bukan tipe yang bisa disukai orang, maka aku tak peduli jika ada yang memperlakukanku seperti makhluk yang menjijikkan, dan aku justru curiga bila ada yang memperlakukan diriku dengan penuh kasih sayang, seperti Kiyoko ini.”

(Natsume Souseki (terjemahan Jonjon Johana, 2012:11))

Kutipan 21 :

廃せばいいのと思った。気の毒だと思った。それでも清は可愛がる。

*Yoseba inoni to omotta. Kinodokuda to omotta. Soredemo Shin wa kawai garu.*

“Kadang-kadang aku ingin dia berhenti melakukan hal itu karena akan berakibat buruk baginya. Tetapi dia tetap menyayangiku.”

(Natsume Souseki (terjemahan Jonjon Johana, 2012:11))

Kutipan 22 ;

何だか清に逢いたくなった。

*Nandaka Shin ni aitakunatta.*

“Entah mengapa aku jadi rindu bertemu Kiyoko”

(Natsume Souseki (terjemahan Jonjon Johana, 2012:68))

Kutipan 23 :

「しかし先生はもう、お嫁がおありなさるに極つとらい。私はちゃんと、もう、睨らんどるぞなもし」

「へえ、活眼だね。どうして、睨らんどるんですか」

「どうしててて。東京から便りはないか、便りはないかてて、毎日便りを待ち焦がれておいでるじゃないかなもし」

「こいつあ驚いた。大変な活眼だ」

「中りましたろうがな、もし」

「そうですね。中ったかも知れませんよ」

*[Shikashi sensei wa mou, o yome ga oari nasaru ni kyokutto rai. Watashi wa chanto, mou, niran doru zona moshi]*

*[Hee, katsugandane. Doushite, niran dorundesuka]*

*[Doushitetete. Toukyou kara tayori wa naika, tayori naikatete, mainichi tayori wo machikogarete oi deru janaikamoshi]*

*[Koitsua odoraita. Taihenna katsuganda]*

*[Atarimashitarougana, moshi]*

*[Soudesune. Attakamoshiremasenyo]*

““Tetapi, guru ini pasti sudah punya istri. Saya sudah punya dugaan seperti itu.”

“Wah, pandangan yang tajam sekali ya. Kenapa menduga seperti itu.”

“Kenapa? Bukankah setiap hari Anak selalu menunggu berita dari Tokyo? Kan setiap hari menanyakannya?”

“Wah benar-benar mengagumkan deh. Ini betul-betul pandangan yang sangat tajam”

“Tepat kan?”

“Bagaimana ya. Mungkin saja tepat ya””

(Natsume Souseki (terjemahan Jonjon Johana, 2012:127))

Kutipan 24 :

お婆さん、東京へ行って奥さんを連れてくるんだと答えて勘定を済まして  
*Obaasan, Toukyou he itte okusan wo tsuretekurundato kotaete kanjou wo sumashite*

“Nek, aku akan ke Tokyo untuk menjemput istriku”

(Natsume Souseki (terjemahan Jonjon Johana, 2012:231))